

伊予路Ⅱ歴史と文学の旅

故 後 藤 知 久

旅立ち

九月二十九日、三十日の二日間、史談会秋の研修旅行に参加する。今年二度目の研修旅行である。総勢二十三人。

生憎の空模様だったが、今日一日は雨の心配はないように思えた。

コースは、臼杵から船で八幡浜（やわたはま）まで。以後は陸路で松山へ。松山では松山城・子規博物館・道後温泉を見学、最後に石手寺にお参りして、一日の日程を終える。

翌日は、「坊っちゃん温泉」の早朝入浴、惣河内神社・一畳庵・金比羅寺（川内町）を経て、砥部焼の伝統産業会館を見学し、最後に内子町を見学して、同じコースで帰途についた。

さて、私にとっては、伊予路の旅は三十年ぶりのこと

である。あの時の思い出としては、小雨に煙る夜昼時の難所を越えたことだけが記憶に残っている。この難所も今はもうトンネルになっていて、かつての苦労はしなくていいようになっていた。しかし、いたる所で道路工事が進められていた。それにしても山の多い所である。佐伯も、山の多いことでは人後に落ちないが、これほど両側の山が迫って、まるで谷間を蛇行しているような気がした。頭の中で描いていた四国のイメージとは遠くかけ離れていた。

途中、伊予市の太平という所で昼食を取った。合掌造りのドライブインだったが、出されたお弁当は結構おいしくて思わず箸が進んだ。滅多においしいものに出会わない昨今だが、帰途寄った店の昼御飯といい、何れもおいしく頂けた。

松山城

松山城は、期待していた程の感銘はなかった。身近に熊本城という名城があることにもよるのだろう。加藤嘉明によって今から三百八十年程前に築城されたそうである。



松 山 城

ばせるなど、幾ら偉いお殿様とはいっても、酷な気がした。

子規記念博物館

昭和五十六年四月オープン。話はがらりと変わって歴史から文学へと移動する。

松山や秋より高き天守閣

子規

私の心に一番残ったのは、この城の立派な石垣を築くため、「おたた」と呼ばれる、頭の上

に魚籠をのせ、行商をしていた女たちに、石を運ばせたということである。幾ら頭で物を運ぶ商売とはいえ、その頭で石を運

松山と言えば、必ず思い出す人の一人である。夏目漱石の『坊っちゃん』と共に俳句の大家としての子規を知らない人はいないだろう。その館内を名実共に俳句で埋め尽くしている。だが、私が思わぬ発見をしたのは、最後の方に展示されていた愛媛県の著名人のコーナーの中である。

「井上正夫」「森 律子」「丸山定夫」等々、かつての舞台の名優たちの名前である。軍人とか政治家、それに学者などではなく、つまり役者さんである。ところが、当日案内役を引き受けてくれた、伊予史談会事務局のペテランの女子職員の方が話しかけてきて、見学はそっちのけで芝居や音楽の話の花が咲いた。



加藤嘉明が植えたと伝えられる大杉

その井上正夫といえは、水谷八重子と演じた『大尉の娘』広島原爆で亡くなった名ブレイヤーの丸山定夫。目をつぶると、当時の面影が浮かび、暫くは其処にたらずんでいた。

俳句の話が出たが、それにはもう一人有名な人がいる。帰途立ち寄った惣河内神社に仮住まいし、一畳の部屋で俳誌『洪柿』を主宰し、人間修行としての俳句の境地を開き、門弟の指導に当たった松根東洋城その人である。今もその一畳の部屋は残っている。そして、これも珍しい、十月から十二月にかけて咲くという「百日桜」が、雨の中、私達を迎えてくれた。



一畳庵松根東洋城の歌碑

一畳庵ひたきくるかと
便りかな 巨星塔

また、同じく俳人の山頭火も松山をこよなく愛し、「一草庵」と名づけた住まいで句会などを開いていたが、此所で亡くなったそうである。

そのほか、内子町の古

い白壁の町並みの各家々の玄関には、竹と木で作った素朴な灯笼が下がり、誰の句か知らないが、それぞれ筆で書かれていた。その幾つかを読んでみたが、いずれも優れた作品ばかりだった。恐らくこれも「まちおこし」の一つの取り組み方だと思っただが、これなど自分の町をよく知った上での取り組みではないかと、私は感心した。

第五十一番札所 石手寺

四国八十八ヶ所の中でも有名な札所と聞いている。その言葉に違わず、お参りの団体が後から後からと続く。そんな光景を見ながら私はこんなことを考えた。



石手寺三重の塔と山門



「松山の印象は？」

と聞かれたら、

「そうですね。いろんなものが雑然と同居して、お互いにそれが当たり前といった感じでしょいか」

これは、道々ずうっと思い続けたことである。見ていて私達がなんとなく大らかに見えるほど、こせこせしているように思えた。そう。高校生になった子供の部屋が乱雑に散らかされているので、少し掃除をと口を出すと、「当たるな。これが一番やりやすいんだ」

と言われるようなもので、雑然とした中に、ある種の秩序を感じ、生きているのかもしれない。しかし、同じ宗教に関わりあいのある惣河内神社は、周囲が静かであったことにもよるのか、小雨の中、それらしい雰囲気を感じた。

美しい白壁の町内子

今度の旅で最も感銘を受けたのは内子。昨年訪れた柳井にも同じような町並みがあったが、此所の方がずうっと素晴らしかった。もう一つの特徴はこの町で蠟燭が作られているということだったが、製作の見学は出来な

かった。ただ私が一番印象に残ったのは大正の初めに建築されたという歌舞伎劇場内子座の見学である。他の人には中に入らなかつたが、私は入場料を払って中に入り、ついでに舞台で簡単な所作を試みた。そして何とも言えない温かみに、一流の歌舞伎役者が此所で公演を持つという気持ちが分かつたような気がした。

客席と舞台。それが身近に感じられ、広さも適当で、

文化会館と違つた雰囲気
を醸していた。プロでは

ないが、私も一度この舞
台に立ちたくなつた。

いろんなことを書いて
きたが、旅行の目的の本
命はあくまで歴史の掘り
起こしにあり、今度も「佐
伯氏（氏）」の関わりあい
を求めての旅であつた。

あなたも一度参加して
みませんか。



内子に残る古い町並み

（本文は『週間ポケット』社の提供によるものです）